

■ 研究ノート<sup>\*1</sup>

## 子育て支援における親の人間的発達とは

—支援プログラム作成に向けて—

鈴木 健 史

(篠原保育医療情報専門学校)

### 1. 子育て支援の現状と本研究の目的

#### 日本の親が直面する問題

子育て環境は社会の変化に応じて様々に変化する。例えば、戦後の日本では第1次産業から第3次産業への移行や、それに伴う都市への人口集中と高学歴化が急速に進行した。それらの社会の変化が核家族化や、血縁・地縁を薄れさせ地域コミュニティの消滅を引き起こした。地域コミュニティの消滅により、人間関係の希薄化が進行し、親が以前は得られていた育児へのサポートを得にくいという子育て環境となっている。3歳未満の子どもを持つ女性の約8割は家庭でのみ育児をしており、社会からの孤立感や疎外感を持つ者も少なくないという結果もある(厚生労働省, 2010)。これらの子育て環境の変化は、育児不安や育児ストレスなど育児に否定的な感情を持つ母親が増加する傾向(厚生労働省, 2003)に影響しているとも考えられる。

また子育て環境の変化は、少子化や児童虐待という社会問題も引き起こしている。1989年のいわゆる「1.57ショック」以降、日本では少子化が重要な問題として注目されるようになった。加えて、児童家庭福祉の課題として近年重要視されている「児童虐待」問題であるが、平成25年度に全国の児童相談所で対応した児童虐待相談件数は7万件を超えた(厚生労働省, 2014)。汐見(2002)は、現代の状況では子育ては昔に比べはるかに難しいものとなっており、また社会的なサポートを受けられず、それが親たちのプレッシャーとなり、キレル親た

<sup>\*1</sup> 本研究は2013年度に南山大学大学院人間文化研究科教育ファシリテーション専攻に提出した修士論文をもとに、加筆修正を行ったものである。

ちを増やす原因であると指摘している。また、荒牧・無藤（2008）は先行研究をまとめ、育児への否定的感情を「親側に起因する」ものと「子ども側に起因する」ものとの2つの枠組みにより分類している。「親側に起因する」ものとは、親になることへの移行に伴うストレスや、親の考え方や信念、態度などであり、「子ども側に起因する」ものとは、発達障害・脆弱性・気質の困難さ・児童精神病理などがあげられる。そして、未就学児を持つ母親を対象とした研究から、社会的なサポートが育児への否定的感情を低めることを示唆している。

以上のように、少子化や児童虐待などの社会問題は、社会や価値観の変化など子育て環境の変化に影響を受けているため、個人での解決は難しいと考えられる。そのため、社会的な支援体制の整備が求められているのである。

### 日本の親支援の現状

では、実際に日本ではどのような子育て支援が行われているのだろうか。子ども・子育て支援法の第7条では、「『子ども・子育て支援』とは、全ての子どもの健やかな成長のために適切な環境が等しく確保されるよう、国若しくは地方公共団体又は地域における子育ての支援を行う者が実施する子ども及び子どもの保護者に対する支援」と定義されている（厚生労働省, 2013a）。子ども自身ではなく、保護者に対する支援の部分のみに注目してこの文面を読み取ると、「子育て支援」とは、子どもの健やかな成長のために適切な環境を等しく確保することを目的として、子どもの保護者に対して行われる支援といえるだろう。子どもの保護者に対する支援は、平成19年度から地域子育て支援拠点事業が全国で展開されている。その数は平成23年度厚生労働省の調査によると5,277ヶ所（子育て支援交付金交付決定ベース）であり、全ての中学校区での設置、10,000ヶ所を目指して拡充され続けている（厚生労働省, 2013b）。地域子育て支援拠点の事業内容は、①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進 ②子育て等に関する相談・援助の実施 ③地域の子育て関連情報の提供 ④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施の4つに分類される（厚生労働省, 2013c）。親に対する直接的で効果的な支援の一つとして注目されているのが、④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施である。現在では講習等の一つの形として、親の育児を支援するための多様なグループプログラムが実施・研究されている。

「子育て支援」を目的としたこれらのグループプログラムで、筆者は親の役割取得・遂行の支援を行ってきたが、その経験の中で、支援すべき点は親の役割ではなく、その親の人間関係の持ち方など人としての成長、成熟にあると感じた。この点こそがその個人の子育てに反映されているのではないだろうか。そこで本研究では、親を個人の持つ役割の一つととらえ、親役割を持つ個人としての「人間の発達」を目的とした支援プログラムについて検討することを目的とする。

## 2. 求められる支援の方向性

### 母親の人的発達支援の必要性

児童相談所における児童虐待相談対応件数の調査（厚生労働省, 2008）によると、主たる虐待者は、実母が23,442件（62.8%）と最も多いことから、特に母親支援が重要であると考えられる。しかし「親支援」（本研究では主として母親支援を意味する）は、上述のように子育ての役割遂行に特化している。グループプログラムだけでなく、現状の「親支援」の方向性は、母親という役割を取得・遂行していくことのみを子どもを養育する個人、すなわち親に求め過ぎているのではないだろうか。

現代は女性一人ひとりが様々な自分らしい生き方を求められるようになった。しかし、子どもが生まれると状況が一変し、特に乳幼児期では育児に追われ子どもが中心の生活になる。中央教育審議会答申（中央教育審議会, 2007）にも、「親が、子どもを育て、その喜びや生きがいを感じながらも、仕事やボランティア活動等、様々な形で社会とのかかわりを持つことで、子育てのほかにも様々な活動を通じて自己実現を果たせる環境を整備することも求められている」との記述がある。つまり親も一人の人間であり、子育てという親の役割だけでは十分に満足できないため、子育て以外の様々な活動を通じて一人の人間としての自己実現を果たしていくことが必要であるということであろう。そう考えると、現状行われている「子育て支援」は、子どもの成長・発達のために親が子どもへの関わり方や発達などを学び、親役割を取得・遂行していくための支援であるが、同時にそれは親自身が人として子育て以外の多様な場面で自己実現できるためといった目的も含む総合的な支援であるべきと考えられる。

もちろん、現状の「子育て支援」を行うことで母親が育児を通して人的に発達するとことがあるならば、変革の必要もないだろう。例えば前述の育児に対する否定的な感情は、親であれば誰も経験することでありそれ自体が問題とは言えない。子どもが生まれたからといって、すぐに母親としてのアイデンティティを確立できるわけではなく、育児に対しての否定的な感情を経験しつつも試行錯誤しながら少しずつ親になっていくのである。柏木・若松（1994）は、3歳から5歳児をもつ親を対象とした質問紙調査を行った結果、子どもと過ごす時間の少ない父親は育児に対して肯定的な感情のみを持ちやすいが、母親は育児に対して肯定的な感情と同時に、否定的な感情もあわせもつことを明らかにしている。そして母親には、子どもとの相互交渉の中で親役割を取得し、親として成長していく「親の発達」があると捉えている。さらに、柏木（1995）は、幼児を持ち日々関わりを持っている母親は、父親よりも「柔軟さ」「自己抑制」「視野の広がり」「運命・信仰・伝統の受容」「生き甲斐・存在感」「自己の強さ」という6因子について成長感が高いことを見いだしている。これらの成長感因子には、「人格の発達」に関わる内容が含まれているといえよう。「育児は育（い

く)自(じ)」といわれるが、これらの調査結果は育児によって人としての成長・発達を得られるということを示唆していると考えられる。親は親役割を取得・遂行することで人間的に成熟し発達することができるという側面は確かにあると考えられる。

しかし、河野(2011)は1歳児と3歳児をもつ母親を対象とした調査を行い、育児不安を感じる母親の認知様式の因子として「完璧主義」「対人不信感」「生真面目」を見出している。そして現代の母親は子どもを大切に思い一生懸命に関わるからこそ、完璧な母親になろうとしたり思い通りにいかずイライラしたり、周りの人の評価が気になり他者との信頼関係を築けない、といった現状があると考えている。また少子化が、少ない子どもに手をかけて育てようという、過剰な統制や期待につながっていることを言及し、子どもに一生懸命に向かい合おうとする背景には、子どもに対して過剰に反応し過保護であり、心理的距離を保てないという親の未熟さがあると主張している。また原田(2008)も、現代の子育てに関する問題は、「ちょっといいかげんな、ほどよい加減」がわからない点にあるという。親としての役割を果たすためには、親は自己実現を犠牲にすることが必要であり、そのため子育てをしている親の発達課題は、個人としての自己実現と親としての役割とのバランスをどのようにとるかということであるという。また、中西(1995)は、日本の男女別に職業生活からどのような価値を得ているかということ进行调查し、男女いずれも「人間的成長」がトップになっている。すなわち、専業主婦という職業をもたない場合は、この発達の機会を失っているとも考えられる。さらに柏木(2008)も、人間に限らず生物体は、「種の保存」と「個体自身の生存と発達」という2つの重要な課題をもっているという。「種の保存」とは、子孫を残す行動、つまり妊娠・出産・育児である。「個体自身の生存と発達」とは、自分の心身が安全・快適に保持され成長することである。どちらの課題についても、時間や経済、心身のエネルギーなど有限な資源が必要になってくるため、ほどほどに配分されることが重要であるという。そして、一方の「種の保存」にかかわる育児にのみ自分の資源が投資されてしまうと、自己が不全となり葛藤が生じると示唆する。また柏木(2001)は、親も一人の人間として育児以外の関心や達成の意欲や動機も持っており、親は単に育児のみで成長・発達するだけでなく、子どもや育児とは別な世界で自分の課題を持ち、努力し達成することでも成長・発達すると主張している。これらの研究から、母親が育児のみを通して人間的に発達することには困難があることを指摘できよう。現状の親役割の取得・遂行を目的とした「子育て支援」だけを行っても「親支援」としては充分ではなく、母親役割以外での「自己実現」や「自己成長」の機会を保障することが必要と考えられる。

では、母親にとってどのような一人の人間としての支援が必要だろうか。大日向(2005)は、子育てひろば「あい・ぽーと」の活動の中で、育児中の女性の社会参加支援を行っている。「あい・ぽーと」では子育てを広い視点でとらえ

られるような、子育て講座を開催していたり、ジャズコンサートといった大人が楽しめるイベントを開催している。育児のために仕事を離れ、もう二度と社会に戻れないのではないかという不安を抱く女性や、夫の収入に頼る暮らしに自己のアイデンティティを見失い苦しむ女性には、子育て中だからこそ、大人としての自分を見出せるような場所と時間を提供することを重要視している。

柏木（2008）は、生物体には「個体自身の生存と発達」という重要な課題をもっていると主張しているが、「個体自身の生存と発達」とは、自分の心身が安全・快適に保持され成長すること、つまり「人間的発達」と呼ぶべき要素であると考えられる。このことから、現代日本の母親に必要なとされているのは、「人間的発達」を促すことができる仕組みではないだろうか。先に、子育てや子育て支援においてグループプログラムが実施されていることを指摘した。海外では親役割の取得や自信を身につけることの有効性が確認されているペアレント・トレーニングが盛んにおこなわれており、日本でも近年児童相談所や親支援の場で取り入れられるようになってきている。しかしながら、日本の子育て風土に合わない子育て技術もあり、加えて親役割以外の「人間的発達」の視点が十分にあるともいえない。また、子育て技術は親と子の特性が様々であることから、多様であるはずだが、こういったペアレント・トレーニングは一つの正しいとされる子育て技術を身につけることに特化されている。そこで本研究では、一方的に与えられ教えられる子育て技術よりも、人としての感情や気づきを伴ったグループ体験から、自己の在り方と他者との関係の取り方に気づいたり、個別の学びや心理的成長を通して自分らしく新たな気持ちで子育てに向かっていくことのできる「人間的発達」を促すグループプログラムを作成する。

### 3. 子育て支援のための人間的発達に関する主要な概念の抽出ならびに説明

本研究のプログラムは、親を人間の果たす役割の一つと考え、子育て支援として母親役割を持つ個人の「人間的発達」を促すことを目的とする。この親個人の「人間的発達」は、間接的に子どもとの関係や子育てに対する不安やストレスの軽減につながると考えている。ただし、「人間的発達」は多様な側面を含むため、本研究でいう「人間的発達」は、親役割を遂行することと関連が強いと考えられる側面のことのみを指す。

この「人間的発達」に関しては、乳幼児を持つ現代の母親に必要な、もしくは欠けていると考えられる要素として6つを指摘したい。それらは、①自己理解、②自己受容、③他者信頼感、④心身の感受性、⑤思考の柔軟さ、⑥自己表現力である。これら6つの要素をプログラムで涵養する諸点として設定する。以下では、プログラムの目的を踏まえて、6つの要素を設定した理由と本プログラムでの定義について先行研究を引用し説明する。



## ①自己理解

本プログラムでは自己理解を、自分の性格や内面の理解、自分の考え方の傾向や感情、価値観についての理解ととらえる。小沢（2000）は、人が自己理解を求める背景として、「私という人間で生きている私自身のことを、しっかり納得して生きたい、つまり、こうして生きている私自身のことをもっと納得して生きていきたい」という思いがあるという。また、Rogers（1951）の自己理論では、対象として知覚された自己を自己概念と呼んでいる。そして、この自己概念と実際に経験していることの不一致が心理的不適応であると考えている。つまり、自己理解は心理的不適応状態からの脱却に不可欠であり、自分の在り方や生き方に納得することにつながると考えられる。

そこでプログラムでは自己の性格や内面、考え方の傾向や感情、価値観を理解するとともに、価値観や思考と、感情、行動がどのように影響し合っているかということについて、話し合いの実習を通して気づき学んでいく。また、プログラムの初回に自己開示とフィードバックについての小講義と実習を行うことで、一連のプログラム中に起こりうる他者からのフィードバックによって自己理解を深めることを促す。

子育てとの関連に関しては、次のように考えられる。坂井（2002）は、欧米の先行研究を整理する中で、児童虐待の加害者の要因に着目し、その中で最も注目すべきは、子どもの行動を悪意に解釈する、子どもに非現実的な期待をするなどの「認知の歪み」であると指摘している。自己理解が深まればこの歪みが減少し、より客観的に自己を認識し、状況に適切に対処することができると考えられる。例えば子どもに対してイライラする場合でも、「自分はこのような価値観や思考を持っているために、そういう子どもに対してイライラしてしまう」と、客観的に自分の傾向に気づくことができるだろう。気づくことができれば、その後の行動を変えられる可能性が生まれる。また、自分の考え方の傾向や感情、価値観を理解していれば、より現実的な状況の認識ができると考えられる。例えば、子どもが泣いていることを、自分を困らせるために泣いているととらえる傾向がある親は、子どもに対して感情的に怒ることになりがちである。しかし、自分自身について「私は子どもが泣いていることを、私を困らせるために泣いているととらえる傾向がある」と理解していれば、子どもがなぜ泣いているのかをより冷静に観察し、現実的に理解し、状況に適切に対処することができる可能性が高まるであろう。

## ②自己受容

自己受容とは、自分なりの個性を受け入れている状態、自分の長所も短所もありのまま認められる状態ととらえる。Rogers（1951）は自己を受容する者は、他者を受け入れることもできるため、他人とのよりよい対人関係を持つことができると述べている。また、日本においても名城（1961）や加藤（1977）の研究により、自己受容が積極的で良い人間関係を構築することに寄与しているこ

とが明らかにされている。そこで本プログラムでは、先の自己理解を、この自己受容につなげていく取り組みを行う。人間の多様性を知ることのできるブレインストーミングや、価値観についての実習を行い、他者との違いを知り、比較をすることから自己理解を深める。加えて、他者に受け入れてもらう被受容を体験することで、自己を受容していくということをねらい、たとえば最終回にはメンバーからの手紙を受け取るという実習を組み込む。

育児不安を感じる母親の認知様式の因子として、河野（2011）は1歳児と3歳児をもつ母親を対象とした調査で、「完璧主義」を見出しているが、「完璧主義」であるということは失敗が許せないということである。しかし、人間は失敗から学ぶ生き物であり、子育ても試しながら、時には失敗を繰り返しながら少しずつより良い方法を見つけていく作業である。ところが、少しでも失敗したり短所を他者に知られることを極端に恐れているのが現代の母親の特徴であると考えられる。また、子どもにも完璧を求めすぎてしまう傾向がある。プログラムでは、同じような立場の母親の多様な意見や価値観にふれ、完璧な親などいないということを経験を通して知ること、自分が人と違っていても良いし、失敗する自分も受け入れていく自己受容が起こることが期待される。自分の長所だけでなく短所もありのまま認められ受け入れられること、すなわち自己受容がすすめば、子育てをはじめ、思い通りにいかない生活の各場面で、心の余裕を持って対処できるのではないだろうか。

### ③他者信頼感

他者信頼感があるとは、お互いに率直に話し合えば、他人も理解でき信頼し合えると感じられる状態、自分が困った時、必要であれば戸惑いなく他人に相談したり頼ることができる状態ととらえる。人は他者との関わりを通して自己を問い直し、関係性の中から多くの学びを得て成長していくものである。しかし現代の成年の特徴として、他者と親密になることに対して積極的になれないということが指摘されている（松井, 1990）。そこでプログラムでは、自己開示と相手の印象を伝え合うフィードバックを毎回プログラムで行うことで、お互いを理解し合い、関係を深めることによって他者に対しての信頼感を養うことをねらっている。またプログラムの全回を通してアイスブレイクとしてボディワークを行う。参加者同士が身体的にふれ合うことで、心身の緊張がとれ他者に対する安心感が高まることを期待される。また参加者を固定し複数回を実施することにより、決まったメンバーで場と時間を共有するため、グループの凝集性が高まり、新たな関係が構築されることも期待される。

河野（2011）の調査では、育児不安を感じる母親の認知様式の因子として「完璧主義」の他に、「対人不信感」も見出している。「子育て」が「孤（こ）育（そだ）て」になり、母親が社会の中で孤立しているという気持ちを持ちやすいという現状がある。子育て中の母親を社会的に孤立させないためには、他者と関わり自分が抱えている悩みや不安を共有する必要がある。しかし、他者に対し

での不信感があれば遠慮や躊躇が生まれ、自分の話をしたり相談することもできない。子育てに関して周りの人の評価が気になり他者との信頼関係を築けないということもあると考えられる。例え相談ができて、悩みや不安など本当に話したいことについて自己開示し話せなければお互いを理解し合うこともなく、他者との関係が深まっていくこともない。すなわち社会的資源を活用するには、母親自身が他者に対して信頼感を持っていることが重要になってくる。プログラムにおいて他者信頼感を得ることができれば、母親の子育てに対する不安感を払拭することができるのではないかと考える。

#### ④心身の感受性

心身の感受性とは、自分の身体の緊張や、他者との関係の中で安心できる距離感や表情などに気づくことができる、他人が身体と心で何を感じているかを推測することができることととらえる。グラバア（2013）は五感を磨くことで自分のものの知り方の枠組みを自覚することができる」と述べている。また、人は一人ひとり感じ方や考え方が違うという認識を持つことができ、その結果自分の枠組みによってすぐ判断するのではなく、相手の意図を推し量ったり距離を取って事態を見ようとする可能性があるという。これは自己理解にもつながることであり、身体的な感受性を磨くことは他者との人間関係構築に有益と考えられる。そこで自分が何を感じているのかを探る一つの方法として、身体から心を探るボディワークを実習に取り入れる。「肩が落ちる」など、心の状態を身体の様子を持って表す言葉が多いように、心の状態は無意識に身体に現れる。身体の状態に注目することで、意識されていない自分の在り方に光を当てることができる。

また、ボディワーク実習を通して、自分だけでなく他者の心身への感受性を高めていくことで子どもとの関係が改善される可能性がある。ボディワーク実習では参加者同士のスキンシップが行われる。子育てにおいても愛情を表現する一つの手段として、非言語のコミュニケーションであるスキンシップが行われる。光盛・山口（2009）は、0歳から3歳までの乳幼児をもつ母親を対象として、ベビーマッサージを体験した母親と体験していない母親との比較検討を行っている。それによると、ベビーマッサージの経験のある母親は経験のない母親と比べて育児不安・育児ストレスが低く、母親が乳児に「触れる」、乳児は「触れられる」という相互作用により、快感情を提供することにつながり、母親の養育態度の感受性を高め子どもへのアタッチメント形成を促す手段として効果があることを示唆している。言葉で愛情を表現できなくても、抱っこをしたり頭をなでるだけで子どもは親からの愛情を感じ取ることができるだろう。しかし、スキンシップの難しいところは、人によって心地よいと感じる程度が異なっていることである。お互い心地よいスキンシップをとるためには、相手がどのように触れたら心地よいかということだけでなく、母親自身が触れられる心地よさを知り適切な距離や接触方法を探らなければならない。そのた



めにも、自他の心身に対する感受性を伸長することが有用と考えられる。

#### ⑤思考の柔軟さ

思考の柔軟さとは、物事を様々な角度から、多様な視点でとらえることができること、自分とは違う考え方や価値観を理解し、取り入れることができることととらえる。原田(2008)は、現代人は育ってきた環境から「マニュアル依存」や「〇×思考」という偏った考え方を身につけてきているのではないかと指摘している。自己の考え方に固執し、物事を多様にとらえられなければそこで起こってくる感情に支配されてしまい、自己のコントロールが利かなくなるということが考えられる。例えば中田(2006)は大学生を対象とした調査で、自己否定的なイラショナル・ビリーフ(非論理的な思い込み)傾向が強い者ほど感情の統制が取れないことを明らかにしている。そこでプログラムでは、個人の価値観や思考に関する話し合いの実習を行ったり、ブレインストーミングの実習を通して、他者との違いを認識することや、新しい視点を取り入れることで思考の柔軟さを身につけていく。

社会や価値観の変化などが子育てに影響していることは先に述べたが、「合理主義」や「競争主義」、「三歳児神話」などに代表される母親が子どもをきちんと育てるべきという考え方によって、子育てに大きな困難やストレスを感じている母親は少なくない。そのような偏りのある考え方や硬直した考え方は、それまでとは違った視点を取り入れることや、客観的に自身の現在の思考方法を見直すことによって修正することができよう。そしてそれによって、子育てに感じる困難さを軽減できる可能性がある。

#### ⑥自己表現力

自己表現力があるとは、自分の気持ちや思いを伝える方法(方法の種類)を多数知っている、自分の気持ちや思いを人に伝える時、状況に応じた伝え方ができる状態ととらえる。岡本(1999)は、日本では女性が社会から従順、円満、調和といった役割を強調されてきたという。しかし、女性が自らの生き方を選択することができるようになった現代では、他者との対等な関係性の中で他者からの期待と自己の欲求や関心とのバランスをとることが重要であり、そのため自己主張や相互交渉ができるようになることが求められると述べている。そのためプログラムでは、自分の感情や思いを率直に伝えるためのスキルを学んだり、ブレインストーミングで感情の表現、処理の仕方について様々な方法があることを知り、バリエーションを増やしていく実習を取り入れる。

感情の表現の仕方は様々あるが、そのバリエーションが少ないと、対処できない場面が増加する。例えばイライラした気持ちを抱えている場合、その気持ちを言葉で子どもに伝える多様な方法を知っているだけでなく、水を飲んで気持ちを落ち着かせることや、相談できる人に電話をするなど、その感情を処理する方法を多く知っていることが適切な対処には必要である。それを知っておくことで子どもと親がお互いに不満感情を蓄積することを防ぐことができる

し、それにより虐待のリスクを減らせる可能性もあろう。また、自己理解や思考の柔軟さ等との関係から、イライラや悲しみなどのネガティブな感情も必要なものであると感じられるようになると、感情に対処することができるのではないかと考える。

### 3. まとめ

本研究では、親を人間の果たす役割の一つと考えた。そして母親がプログラムに参加することで、自己の感情や行動に対する新しい視点を学び、親としてだけではなく、一人の人間として成長できるプログラムを作成することを目的にしている。そして、自己理解、自己受容、他者信頼感、心身の感受性、思考の柔軟さ、自己表現力という、親役割を遂行することと関連が強いと考えられる6つの「人間的発達」の要素をねらいとするプログラムを作成し提案した。

筆者が以前勤務していた保育園で、乳幼児を子育て中の母親が、「子育て支援センターの職員や、子育ての悩みを聞いてくれる子育て支援のNPO団体の職員さんも、私に良い母親になることばかり求めてくれることがとても辛くて、二度と相談できなかった」と話していた。子どもの健やかな成長のために子育て支援を行う事はもちろん大切だが、親になろうと努力している母親を一人の個人としてとらえ、その気持ちに寄り添うという視点が欠けてしまう場合があるのではないだろうか。子育てスキルの習得や育児に関する情報伝達だけではなく、母親の「人間的発達」支援をバランス良く提供していくプログラムの提案、実施が待たれているといえるだろう。

なお、このプログラムについてはすでに作成・実施にうつされている。その結果は概ね目的を達するものであった。このプログラムに参加することで、「人間的発達」として設定した6つの要素に変化があること、子育てや家族関係について良い変化があった、役に立ったという参加者の声があることも結果として得られている。しかし、課題も残されているため、その詳細については稿を改めて慎重に議論したい。

### 引用文献

グラバア俊子(2013)．五感の力 創元社

厚生労働省(2003)．厚生労働白書平成15年度版

厚生労働省(2008)．児童相談所における児童虐待相談対応件数等

〈<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv16/>〉(2014年11月26日)

厚生労働省(2010)．厚生労働白書

厚生労働省(2013a)．子ども・子育て支援法

〈<http://law.e-gov.go.jp/announce/H24HO065.html>〉(2014年11月26日)

厚生労働省(2013b)．地域子育て支援拠点事業実施状況(交付決定ベース)

平成23年度実施状況 〈<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/23jokyo>〉

- pdf) (2014年11月26日)
- 厚生労働省 (2013c) . 地域子育て支援拠点事業とは  
([http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/kosodate\\_sien.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/kosodate_sien.pdf)) (2014年11月26日)
- 厚生労働省 (2014) . 平成25年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数等  
(<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000052785.html>) (2014年11月26日)
- 柏木恵子・若松素子 (1994) . 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, pp.72-83.
- 柏木恵子 (1995) . 親子関係の研究 高橋恵子 (編著) 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房 pp.18-52.
- 柏木恵子・永久ひさ子 (2000) . 子どもの価値研究 LACCP報告
- 柏木恵子 (2001) . 子育て支援を考える 岩波書店
- 柏木恵子 (2008) . 子どもが育つ条件 岩波書店
- 加藤隆勝 (1977) . 青年期における自己意識の構造 日本心理学会モノグラフ委員会
- 河野順子 (2011) . 母親が抱える育児不安に関する要因-子どもの育てにくさ, 母親の認知様式, 父親の育児参加をめぐって 東海学園大学研究紀要, 16, pp.55-64.
- 松井豊 (1990) . 友人関係の機能 社会化の心理学ハンドブック 斎藤耕二・菊池章夫 (編著) 川島書店 pp.283-296.
- 光盛友美・山口求 (2009) . 養育期における母親の子ども虐待の予防に関する研究：ベビーマッサージを体験した母親と体験していない母親との比較検討 日本小児看護学会誌, 18 (2) , pp.22-28.
- 中田 (北出) 薫 (2006) . イラショナル・ビリーフと感情の体験様式との関連 感情体験尺度作成の試みを通して パーソナリティ研究, 14 (3) , pp.241-253.
- 中西信男 (1995) . ライフ・キャリアの心理学—自己実現と成人期 ナカニシヤ出版
- 名城嗣明 (1961) . 自己受容と他人受容との関係についての実験的研究 琉球大学教育学部研究集録, 5, pp.49-54.
- 大日向雅美 (2005) . 「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない 岩波書店
- 岡本祐子 (1999) . 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路書房
- 小沢一仁 (2000) . 自己理解・アイデンティティ・居場所 東京工芸大学工学部紀要23 (2) , pp.94-106.
- Rogers, C.R (1951) . Client-centered therapy. Houghton Mifflin. (保坂亨・諸富祥彦・末武康弘 (訳) (2005) . クライエント中心療法 ロジャーズ主要著作集2巻 岩崎学術出版社)

Sanders,M,R. (2008) . Triple P-Positive Parenting Program as a public health approach to strengthening parenting. Journal of Family Psychology. 22, 506-517.

汐見稔幸 (2002) . 親がキレない子育て サンマーク出版

津村俊充 (2002) . Tグループを中心としたトレーニング・ラボラトリ  
ヒューマニステ

イック・グループ・アプローチ 伊藤義美 (編著) ナカニシヤ出版 pp.94-97.

津村俊充 (2010) . グループワークトレーニングーラボラトリー方式の体験学  
習を用いた

人間関係づくり授業実践の試み 教育心理学年報, 49, pp.171-179.